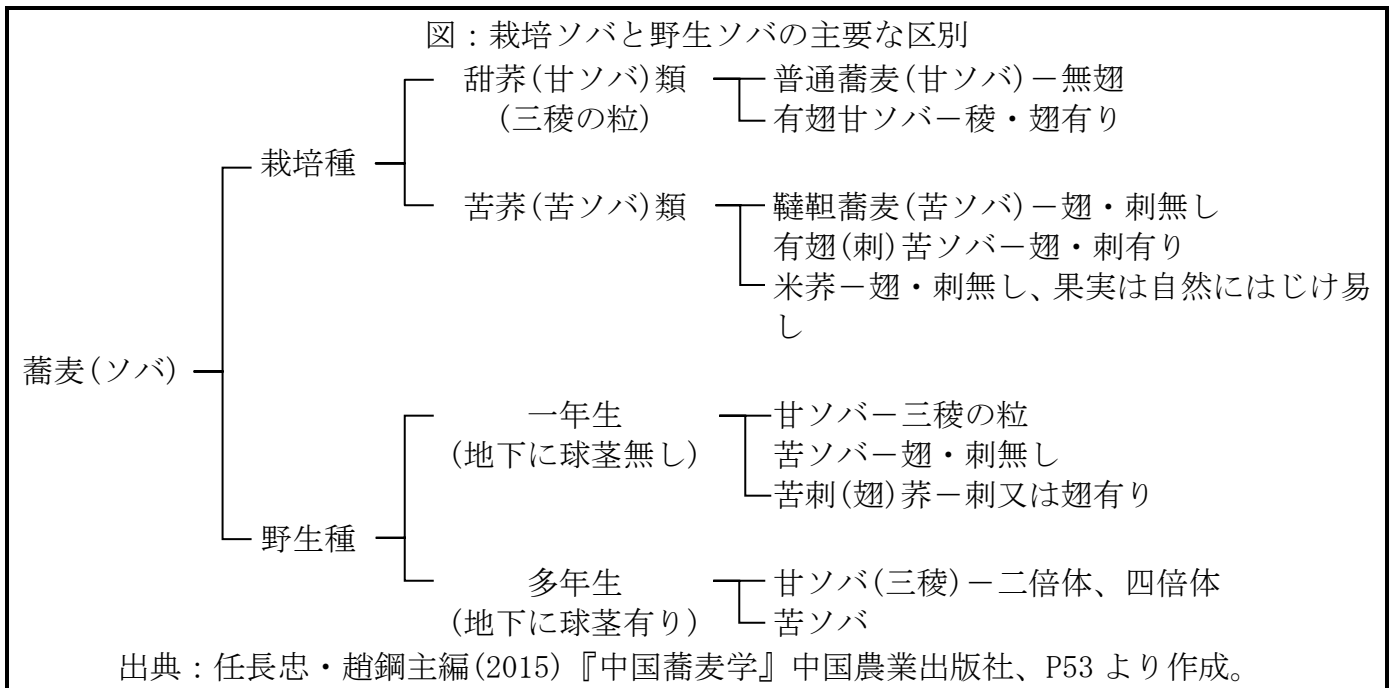


中国人科学者によるソバ族新種の発見について

江戸ソバリエ 小島末夫

蕎麦(ソバ)は、周知のとおり植物分類学的に申しますと、米や麦類など穀物のイネ科ではなく、タデ科ソバ族に該当しています。



このソバ族植物資源については、既に中国が起源地であり、同国に豊富に存在していることはつとに有名です。それは品種的に捉えると、主に次の2つの類型に大きく分かれます。すなわち、上図で示したように、一つは栽培種としての「普通蕎麦」(中国では世間一般に“甜荞”〈甘ソバ〉と呼ぶ)と「韃靼蕎麦」(ダツタンソバ。同“苦荞”〈苦ソバ〉)であり、もう一つはその他に包含されるソバ近縁の野生種であります。そのうち後者に関しては、これまで数多くの種が発見されてきており、なかでも葉の部分をも漢方薬材に広く利用する宿根(シャクチリ)種のソバが、我が国でも古くから知られているところです(注：中国での通称は“金荞麦”)。

また従前の科学研究では、中国においてソバ族植物は合計21種が今日までに確認され命名されてもいます。このうち栽培ソバの野生祖先種を始めとする7種に関しては、京都大学の近江名誉教授により前世紀の1990年代を通じて発見されたことは、皆様もよくご存知のとおりです。これらの中で、栽培種を除くその他の野生種については、主として四川省、雲南省、チベット自治区など中国西南地区の標高が高く険しい山間部や長江上流の金沙江流域に、幅広く分布していることが判明しています。特にこのソバ野生種は遺伝資源を多く含んでいることから、栽培種のソバの育種改良に対して重要な促進的役割を大いに果たしてきたと言われます。

さらに、ソバ族植物の様々なタイプの花については、次に掲げる2通りのタイプが主であると伝えられてきました。すなわち、一つ目の類型は、他殖性で自家不和合性を示す異形花型の二型性の花(長柱花と短柱花が異なる長さのタイプ)であり、二つ目の類型としては、自殖性の自家和合性を持つ同型の花(花柱が同じ長さのタイプ)が挙げられています。上述したように最近に至るまで合計21種が見つかっており、それらのうち13種は前者の二型性の花で、残りの8種が同型の花に数えられると指摘されてきたのです。とはいえその一方で、筆者がこのほど入手した中国蕎麦研究界の現下における総合的な集大成本ともいえる、任長忠・趙鋼主編の『中国蕎麦学』を見てみると、刊行された2015年当時で既に世界で発見・命名されたソバ種は、全部で28種に上ると説明されています。因みに同内訳は、小計23種のほか、2つの亜種と3つの変異種から構成されるようになって

おります。

こうした状況の下で、中国では先頃、ソバ族の新たな種が発見されたというニュースが一斉に報じられました。実際、中国の『農民日報』、『科技日報』などの各紙やネットサイトでは、去る2月初めに相次いで以下のような記事を配信したのです。それによりますと、中国農業科学院作物科学研究所（略して“農科院作物所”）の特産農産物優良生殖質資源発掘・革新的利用イノベーションチームは、同国の野生ソバ資源に関する長年の調査・研究活動において、四川省涼山 族自治州南部の雲南省との境界付近に位置する会理県内で、タデ科ソバ族の新種を発見したということです。この新種は、発見者にちなんで「**長花柱野生蕎麦**」(*Fagopyrum longistylum* M. Zhou&Y. Tang) と名付けられたそうです。また関連の研究成果の一部については、本年1月29日に著名な国際植物分類学雑誌『PHYTOTAXA (植物分類)』の誌上で発表されており、同学界では公式的に報告済みであると述べられています。

上記チームの責任者を務めた農科院作物所の周美亮研究員によれば、過去数年間にわたり中国西南地区を中心に雲南・貴州・四川・甘粛・陝西の各省及びチベット自治区などの地で、累計5万km余に達する現地調査を敢行してきたとの話です。その結果、総計20余種、1,069件に上る野生ソバ種並びに栽培種野生類型の貴重な一次標本資料などを採取・収集できたと言います。こうして、中国における野生ソバ種の最新分布状況や範囲などが一層明確になると共に、同行程を通じた調査研究の一つの成果として、遂に今回の新種発見に繋がったとのことでもあります。

当該種が野外で発見された際には、ソバの株上の花房は、異形花型の中で唯一の単形花型を示しており、換言すれば全てが長柱花タイプ（雌蕊が雄蕊よりもかなり長い）のものだけで且つ自家和合性であって、短柱花タイプのもは一切発見されなかったそうです。その上で改めて2018年～20年の3年間、北京、成都及び涼山（四川省）における3カ所の試験圃場で、それぞれ個別にその子孫の株形態と花の推移に着目し、受粉と結実の遺伝状態を入念に観察し続けた由です。そうした結果、その形態的特徴がまさに野外での生育状況と完全に一致しており、遺伝特性も安定的に備えている点があったというわけです。そこで、これこそがソバ族第22種目にあたる「長花柱野生蕎麦」と新たに命名した決め手の要因であったとのことでもあります。

いずれにせよ、上述した一連の大がかりな調査研究に伴う詳細な全容がまだ十分には明らかにされていない状況にあるため、ソバ族の進化過程など更なる研究解析に資する前広な資料や情報の提供が待たれるところです。

以上